
アナリシス

中原有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナリシス

【Nコード】

N9583L

【作者名】

中原有

【あらすじ】

不老不死の人間がいる、と。噂でそんなことを聞いた僕は、到底信じられなかったし、あくまでもそれは噂なのだからと思っていたのだけれど、そうも思っていられないような、出会いが起きた。

噂というのは、大規模な伝言ゲームみたいだ、と僕は思う。

しかし、それが成功することは、決してないのだろう。

そもそも、ゴールなんていうのはどこにもないし、人の噂も七十五日というように廃れて消えてしまうものだ。

そのうち、あれやこれやと尾ひれがついた大きなものにならなくなっていきなり、もしくはもともとの発信源からが嘘だったり。

とにかく、所詮、噂は噂。

あまり鵜呑みにするものでもない。

直接それを体験した人物に聞いたのならともかく、私の友達が、友達の友達から聞いたらしいんだけど、というのは全くもってあてにならない。

しかし。

それが全く、一ミリも真実を掠っていないかと言われると、どうなのだろう。

僕には、分からない。

零話

学校から直で帰ってきた僕は、表面上僕の部屋とされているが、しかしパソコンが置いてあるのでパソコン部屋と呼ぶ方が正しく、主に学校から帰ったときや一人でぼんやりしたい時にしか居ないような、そんな部屋にいた。

パソコンの隣に置いてある、僕の勉強机という名の物置にうつ伏せになっていたのである。

このスペースを取るために、端に教科書やらプリントやらがうず高く積まれている。

僕がしたのだ。

しかし、今はバランスが取れているから良いが、少しでもずれると僕に被害が及ぶのではなからうか。

折角積んだのに、水の泡だ。

僕はあと一分だけ、と心に決めて目を瞑る。

丁度その時、右横からコンコンと何か叩く音が聞こえた。

誰かが窓を叩いたのだとすぐに分かる。

ちなみにここは二階。

登るための木なんてものがあるわけでもないのに、彼女は脅威の脚力と腕力で這い上がってくるのだという。

僕はその現場を見たことはないし、これからも見たくはない。

僕はうつ伏せのまま顔をずらして窓を見て、口パクで「開いてる」と言った。

相手は理解したのかしていないのか、嬉しそうな顔のまま窓を開けて入ってきた。

「よ」

顔を起こして挨拶すると、暁はにやはと笑った。

真っ黒の、何の柄もない少し大きめのワンピースをずっぱりと着てきて、それに加えて真っ赤なタイツ。

ツインテールに少し手を加えた、顔の左右に大きな輪ができたような髪型。

前髪は、いつものようにきつちりと、目の上でそろえている。

「今日はいつてもより可愛い髪型だな」

「そっかな。これ、すごく簡単なんだよ」

暁は輪の真ん中に手を入れたり、くるくると回して遊んでいた。

そして床にペタリと座り込む。

「学校はどうなのかな。あーちゃんは楽しくやってるけど、きみは確か、まじか桐誤回くんと一緒のクラスになれたんだったよね」

そういえば、暁にはそんな報告をしていたんだったか。

今は四月。

新学期の時期だった。

つまり、クラス替えが、ついこの前あったばかりということだ。

「高二つて、修学旅行とかあるだろ？ すごく、助かった感じはする」

「そうだね。桐誤回くん以外に、あんまり友達いないんだよね。そういうえば、はな葉菊胡宮ちゃんは、違うクラスなんだっけ」

僕の友人関係を、どうして暁はこんなに了解しているのか、いつも不思議に思う。

「フルネームまで、よく覚えてるよな」

「あーちゃんは名前覚えるの得意だよ！ それにさそれにさ、きみから聞く名前って少ないからね。あとは、きみから聞く名前だからかなあ」

相変わらず邪気のない笑顔でニッコリと。

「どういう意味だ？」

「分かってるんだよねきみは。あーちゃんはきみが好きだからね、きみの友達の名前ぐらい知っておきたいんだよ。会ったことはないけどね」

「……そりゃどうも」

「来年、クラス替えてまた一人になっても、あーちゃんがいるからきみは大丈夫だよ」

「学校違うから関係ないんじゃないか？」

「そうでもないよ」と暁は笑う。

暁が通う学校は、制服がない。

今日も、この格好のまま学校から帰ってきたのだろう。

「あ、そうなんだそうなんだ」

暁は、両手をパチンと合わせる。

「不老不死の噂を聞いたんだよ」

急に何を言い出すかと思えば。

「不老不死？」

にこにこ笑顔を見せる暁の言葉を、僕は繰り返した。

「うん、そうなんだよね」

暁は頷いてから、足を伸ばして床に座っていたのを、膝を曲げて両手で包むようにして座り直した。

つまり、体育座り。

「学校で噂してるんだよ。不老不死の人がこの辺りをうろろして
るんだって」

「ふーん」

気合のない声を返した僕を、暁は下から覗き込むようにする。

「きみは、興味無いのかな」

「無いつていうか、現実味が無さすぎる話だなあと」

「やはは、と邪気の無い笑顔で笑われた。

「確かにそうかもしれないよね。学校の七不思議みたいな、みんな
が面白がって噂してるみたいなさ。そうやって噂してる人の誰も会
ったことないんだって」

「噂って、そういうもんだからな」

「本当に、いるのかな」

どこか陰のある笑顔で、暁は言った。

「不老不死ってさ不老不死ってさ、本当はすごく最悪な事だよね。

死ねないんだってさ。そう思ったら、いない方がいいんだよね」

それには僕も激しく同意だった。

生き物は、いつか死ぬ事が確定であるから生きていけるのだ、と僕は思う。

死ぬのが怖い、とはよく言うけれど、死なないのも怖い。

精々五十年やそのあたりまで生きれば、十分……というのは、今の僕の勝手な意見である。

死なないから嬉しい、死なないのは嬉しい、というのは、僕にとっ
ては成り立たない。

「死なない生き物はいないと、思うな。壊れないものもないだろ。

……多分」

「そうだね。そうだったよね。あーちゃんもそう思うよ。これで安心だね」

いつもの笑顔で言うから、僕には暁の真意は読み取れなかった。

そんなの、考えなくても分かるような、ただの噂だろうに。

一話

「もし、興味があれば」と。

そんな言葉とともに、爽やかな胡散臭い笑顔で渡された紙を、僕は見つめる。

そこには、時間の詳細と、場所が書かれていた。

今日本日。

学校が終わった後に、適当に時間を潰してから向かえば十分な時間だった。

「……」

興味って。

興味があればって。

何だそれ。

僕は考えて、首を捻った。

さて、どうしたものだろう。

教室にて。

僕の言葉に対し、桐誤くんは特に考える風もないままに承諾した。

「で、どこに何しに行くんだよ？」

と、ごく普通に、それがさも当たり前のように訊ねてくる桐誤くん。誤魔化せる様子ではない。

最も、誤魔化そうだななんて思ってもいけないけれど。

「僕も、あんまり分かってなかったりする」

「はあ？」

桐誤くんは、不機嫌そうに眉をひそめ、もう一言僕が余計な事を言つと、キレだしそんな雰囲気だった。

こんな反応も当たり前だろう。

想定はしていたが、チキンな僕は怖気づいて、言い直す。

「場所は、あそこだよ。学校から駅までの道にある、年季が入った

店っていつか、あの怪しげな所」

桐誤くんは、あー、と思い出すように頷いて、

「あんな所に行くのかよ？つーか、あれって店なのか？年中、閉店
って札がかかってなかったっけ」

「それはそうなんだけど」

僕は続けた。

「噂の真相に、もし興味があればって、言われたんだ」

「噂？何だよそれ」

「この辺りに、不老不死の人がいるだとかって噂」

桐誤くんは、初耳だと言わんばかりに目を向けて、力無く笑った。

呆れるように、と言うほうが正しいのかもしれない。

「誰に、なんて質問は置いとくとして。何だその噂。聞いたことね
ーんだけど。それに、あくまで噂は噂であって、噂に真相なんても
んがあんのかよ？不老不死なんてあるわけねーし、誰かが面白半分
に流したもんだろ？噂している奴らだって、その辺は分かってるこ
とだ」

桐誤くんは顔を上げないままに椅子にもたれかかると、僕に視線だ
けを向けた。

「で、誰に言われたんだ？」

隠さなければならぬことではないし、隠すべきほどでもないのだ
ろう。

隠す必要なんてないことだ。

僕は答える。

「化沼さんに」

桐誤くんは、やれやれと溜息をつく。

「あの、いけ好かねえ野郎か」

「いけ好かないかどうかは知らないけど、前に一回、会ったんだっ
け」

学校帰りに、と付け足すと、桐誤くんは「まあな」と肯定した。

「もう二度と会いたくないと思ったな。ああいう奴は、腹が立って

仕方がないんだよ。今のところ、あいつとデッドヒートだな。どちらが嫌いかと言われると、難しい」

「あいつって、葉菊さんのこと？」

「他に誰がいるんだよ」

あっけらかんと、当たり前のように言う。

「僕には、どうして桐誤くんが葉菊さんのことをそこまで嫌うのか、分からないな」

「俺には、どうしてお前があいつを庇うのか分からねーよ」

「良い人だと思う」

「悪い奴だろ、どう考えても。駄目な奴って言うてもいいけどよ
あからさまに、嫌な顔を隠そうともしない。」

「もう、早く行っちまおうぜ。時間は？」

僕は時計を見る。

良い頃合い、と言っても差し支えない時刻だった。

一の話

それを目の前にして、僕はさらに怖気づいた。

妙に年季の入った古そうな店で、なんとも表現しがたい禍々しい雰
囲気がある。

やはり、桐誤くんを連れてきたのは正解だったろう。

「行くぞ」

頼もしい声と共に開いた扉は、怪しげな音を立てた。

中は、暗い。

「本当にここなのかよ」

桐誤くんは愚痴めいた言葉を口にする。

「そのはず、なんだけど。多分」

僕はそろりと中を覗く。

向こうに、明かりが見えた。

ギシギシと音を立てて近づいていく。

もしここに人がいるのなら、誰かが来たということは明白なはずだ。
カウンターの奥に、四人がけの机がいくつか置かれており、それを
辿っていく。

すると、一番奥の、壁際にひっそりと座っている人物と、目が合っ
た。

「……………」

息を呑んだ。

何か計り知れないものを抱えたような、凜々とした長い黒髪の女の
人。

深窓の令嬢というか、そういう例えが当てはまる人を、僕は初めて
見た気がする。

彼女はとても落ち着いた雰囲気で、静かに口を開く。

「閉店つて札、かかってなかったか？」

「……………」

外見とは裏腹に、頼もしい口調だったことに若干驚きを感じながら、しばし沈黙。

桐誤くんは答えた。

「呼び出されたんですけど」

「誰から」

「それは……」

視線が突き刺さるのが分かった。

僕が答えようとした時、その女の人は「なるほど」と納得がいったように声を出した。

「あいつか。まあいい。とりあえず、こっち来いよ」

言われるがままに、その人の向かい側に僕たちは座った。

近づいてから改めて見ると、僕たちとそれほど年齢は変わらないようだ、と思った。

醸し出す雰囲気こそは大人のそれだが、良く見ると幼さが残る顔立ちだ。

高校生、もしくは大学生だろう。

「化沼が勝手にここに連れてきたのは、お前らで二人目だ。いや、

二人目と三人目って言うべきか」

どっちでもいいかそんなのは、と品定めするように僕たちを見る。

「ああ、自己紹介してないよな。あたしは、あきひ明羅」

「桐誤です」

「あ……くわかわ某川です」

「ん。よろしく」

人懐っこい笑顔を浮かべた明羅さんは、そうだな、と目を閉じた。

「ここへ来た理由はつまり、一つだよな？」

僕は目をそらせないままに言う。

「噂の真相に興味があればと、言われて」

「噂の真相ねえ。笑えらあ」

自嘲気味に笑い、明羅さんは席を立つ。

何をするかと思えば、横にあった本棚から一冊を取り出した。

「時間」とでかでかと書かれた、真っ白な表紙の本だ。

明羅さんは、その一ページ目の紙の端に人差し指を立てた。丁度、指を切るように。

「ててて……」

苦笑いで僕たちにそれを見せてきた。

僅かに、血が染み出ている。

「え、あの」

何がしたいんだ。

明羅さんは、

「まあ見てな」

と言うと同時に、血が出ている人差し指とは違う手でその傷口をなでる。

それはまるで手品をするようであり、しかしそれならば、かなりの熟練ではないだろうかと思わせるような手つきだった。

タネを隠そうともしないような、元々タネなんてないのだと言わんばかりに堂々としている。

「治れー治れーっと。少し、時間がかかると思うぞ。あー、あと五十秒ぐらい」

それからきっかり五十秒後、かは分からないが、大体一分程度だったと思う。

そのままの状態で、明羅さんの手元を見つめいると、

「うし。いけた」

明羅さんは、得意な顔で人差し指を突き出した。

そんな一分ほど念じただけで傷が治るなんて、そんな簡単に人間が出来ているはずもなく

「……」

常識じゃ、無かった。

「何で、傷、が」

つかえつつかえに声を出す桐誤くんは、啞然とした表情だった。

こんな桐誤くんは、初めて見た。

そんな風に、心の底でてんで関係の無い感想を抱いている僕も、きつと同様に間抜けな顔を披露してしまっているのだろう。

「治っているかって？それは、あたしが噂の真相だからだよ」

そう言った彼女の表情は、僕なんかじゃ言葉に表せない、色んなものが混ざっているひどく複雑なものだった。

一の三話

それから、頭が回らない状態で聞いた明羅さんの言葉をまとめるとこうだ。

そうは言うものの、明羅さんが不老不死というわけではない。

他の人より老いる速度が遅く、傷の治りが早いだけ。

傷の治り、と一概に言っても、僕たちが見た通りある程度時間はかかるし、骨が折れたなんて大層な状況では対応しきれない。

「……」

僕たちは、人形のようにコクリコクリと明羅さんの話に相槌をうつた。

ただ純粹に、目の前で語られる話が非現実すぎて、ついていけないのだ。

常識じゃない。

そんなものは、結局漫画や小説だけの話でしかない。

はず。

なのに。

何で。

「それなら、……その、明羅さんは、何歳なんですか」

桐誤くんは言いにくそうに質問を投げかけた。

明羅さんはその質問は想定済みだと言わんばかりに首を振った。

「分からねーんだよ」

「え」

桐誤くんは想定外だったらしく、驚きの声を上げる。

僕は、黙りっぱなしのままだ。

「あたしの一年は、普通の人の一年とはわけが違う。一年経ったから一歳年をとるっていう当たり前が、あたしにとっては当てはまらない。その内、自分の年齢なんて気にもならなくなってきた。どう

せ、外見だつてほとんど変わらねーし。相手があたしを見て、思った年齢で良い」

「でも」

明羅さんは続ける。

「あたしより年下だった奴が、どんどんあたしより大人になっていくつてのは、何というか、物悲しい感じはするよな」

あくまでも外見面での話な、と付け加えた。

不老不死。

僕は暁の言葉を思い出す。

もし明羅さんの言っていることが、本当だったら。

本当だったら。

「まあ、さ。こんなの、信じる奴がどこにいるって感じだし、本気にしなくていいぜ。前の奴はあっさり信じたような事を言っていたけど、これが普通の反応のはずなんだよな。分かるよ。だから、今日のことは夢だったんだと割り切ってくれても良いし、もし、万が一夢ではないと思ってくれるのなら」

そこで、間を持たすように明羅さんは言葉を切って、僕たちを見つめる。

「どっかで会った時は、挨拶でもしてくれ、な」

その言葉を最後に、僕達は席を立った。

二話

「うん、うん、うん」

暁は珍しく神妙に、僕の話を読み込むように頷いた。

そして、座ったまま、椅子に座る僕を見上げる。

「話はよく分かったよ」

それは、いつもの邪気の無い笑顔だった。

「とてもじゃないけど信じられない話だっていうのは、僕が一番分かっているつもりだから、聞き流してくれてもかまわない」

「んーん」

暁は首を振る。

「あーちゃんがきみのことを信じない時なんてないんだよ。きみは、あーちゃんに嘘をつかないよ」

「……えらく、信用されてるな、僕」

独り言のように呟くと、

「だってさ」

と視線を合わせないままに続けた。

「だってさだってさ、きみとあーちゃんは、二人で一人なんだよ。」

二つで一つなんだよ。もし、万が一ばらばらになった時、あーちゃんは生きていけるけど、その時はきみはどうなるのかな」

答えなんて分かりきっているはずだろうと、そんな視線で見上げられる。

僕はそれから逃れるように天井を仰ぐと、電灯からの紐がすぐ側にあった。

もう少し短くしないとなあなんて、場違いに考えた。

「でも、本当にいたんだね。そんな、かわいそうな人が」

「傷が早く治るっていうのは、実際見てしまったから否定できないけど、年を取るのが遅いつていうのは本当かどうか分からないよな。本人も、そう言ってたし」

「いや」

暁は喉から搾り出すような声で、即座に否定する。

「本当だと思うよあーちゃんは」

「何の根拠で？」

「根拠なんてないよ。不老不死になるための研究っていうのは、ずっと続けられているって、噂で聞くよ」

「噂、ね」

今の僕には、噂はあくまでも噂だと断言出来なかった。が、しかし。

否定せずにはいられなかった。

そんなこと、あつてたまるか。

あつて、ほしくない。

「そんなの、」

「本当だよ」

僕の言葉を遮った暁は、笑顔である。

「本当に、そういう噂はあるんだよ。あーちゃんも、あーちゃんも詳しくは知らないけど」

「……………」

頑固、と言つてしまうと聞こえが悪いけれど、僕の言葉を遮つてまで自分の意見を主張するような暁は、珍しい。

何だろう、これ。

「ちなみに、その人って、どんな感じなのかな。外見年齢はどれくらいだと思った？」

「……………まあ、精々僕らと同じぐらいって感じかな。パツと見では、二十歳を越してるようにも見えるかもしれないけど」

「そ、つかそっかそっか」

「暁」

僕は名前を呼ぶ。

「何があつた？」

「……………」

暁はきよとんと、異性物でも見るかのように僕を見上げる。

「何も、ないよ？きみは、あーちゃんが変に見える？」

僕は頷く。

「あーちゃんは、ね」

「うん」

そう呟いた暁にはいつもの笑顔は消え、冷めたような表情が浮かんでいた。

「あーちゃんも、きみに嘘はつかないよ。でも、言えないことは、言いたくないことは、あるんだよ」

暁は額に自分の前髪を押さえつけた。

「きみだつて、そうだよな？」

いつものような笑顔ではなく、かといって情けない顔をしているわけでも、怒ったような表情なわけでもなく、暁はただ僕に問いかけるように言った。

「えつと……」

思わず口を噤んだ。

僕は、暁にだけは嘘をつかないし、隠し事もしない。

そう、心に決めたはずなのに。

「……」

そんな暁を見ると、何も返事が出来なくなってしまったのは、結局、僕は昔と変わらず弱いままだからなのだろう。

結局、僕は。

三話

あんなことがあってからの、翌日。

予鈴と同時に着席した僕は、前の席でひたすら何かを書いている桐誤くんを嫌でも見ることになる。

机は、今なお出席番号順に並べられているため、去年の最初もそういえばこうだったなあなんて、懐かしく思ってみた。

彼曰く、ぼんやりする時間なんて勿体ないから、休み時間には宿題や課題をするのが良い、のだそう。

僕としては、ぼんやりする時間こそあってなくてはならないと思うのだが。

現代生活は、せわしない。

僕たちは、朝の挨拶もしないままに授業を受け始めた。

せいぜい移動教室の時と、昼休みにしか話さないような、付き過ぎず離れ過ぎずの関係。

それが、僕らの日常だった。

「昨日の話、なんだけど」

ピンと、空気が張り詰めた。

昼休み、弁当箱を開けようとした手を止めた桐誤くんは、溜息をつく。

「俺が、わざと触れないでいるのに、某川は。こういつのつて、KYっつーんじゃないか？むしろ、空気読めない某川、でKKか」

「それって、株式会社の略語だろ」

ガクリと首を落とすと、呆れた視線を向けられる。

「何っーか、某川見ると怒る気が失せるというか、何というか」

「それは重畳だな」

桐誤くんは少しの間を取る。

「昨日、か。何つーか、今では手品を見せられた気分なんだけどな」
「手品で傷は治らないだろ」

「んなこと分かってんよ」

んー、と考えるように頭を掻く。

「どつちにしろ、さ。不老不死の人間がいたって、不老不死もどきの人間がいたって、どつちにしろ俺たちは何も変わらねーじゃねーか。不老不死もどきの人間がいますっつっても、ああそうですかって話だろ。信じないのならそのままだし、そうじゃないなら、世の中には不思議なことがあるんだなーって、それだけで終わり」

「……」

僕が何も答えないでいると、桐誤くんはさらに続けた。

「某川の気持ち分からないわけじゃねーよ。俺だって、んなことは言っても興味がまったくなーことも無いからな」

そこまで捲くし立てるように話すと、この話はこれで終わりと言わんばかりに、卵焼きを頬張った。

僕は何も言えなかった。

仕方ない、と思い直したところ、丁度教室の前のほうの扉がそろりと開き、そこから見知った顔が覗き込んだ。

三の二話

彼女はきよろきよろと誰かを探すように視線を回すと、僕たちの方に歩いてきた。

「あれ。まだご飯食べてないの？おっそいねー」

花が咲いたような笑顔で、葉菊さんは言う。

「てめー、来んじゃねーよ。折角の飯がまずくなる」

「ひどいなー、何で桐誤は私のこと、そんなに毛嫌いしてるわけ？」

葉菊さんは僕らの左側にあつた、主がない椅子を引っ張ってくる
と、ちよこんと座つた。

「今日は、面白い話を持ってきました」

わざわざそんな風に説明をする。

言われなくても、僕たちとしては、葉菊さんがここに来たときから
すでに分かっているのに。

ただの何でもない世間話なんかでは桐誤くんが了承するはずも無く。
何か、話がある時にしか、葉菊さんはここへはやって来ない。

そのため彼女が来た時は、僕達は終始聞き手に回る。

あれやこれやと話してくれるため、相槌を打つだけでいいのだ。

僕としては、非常に助かる相手だったりする。

「学校の七不思議って知ってる？」

間をためてから、そんな風に切り出した。

「一応は」

僕が応答すると、

「うん。まあそれはそうだよな。でも、この学校にもあるっていうのは多分知らないんじゃないかな。私も学校の七不思議同好会を作つた友達から聞いて、初めて知つて。それに、高校生になつて七不思議ってどうよって思つのもあるんだけど、まだ私達、高校二年生なわけだし」
「どっちだよ。」

心の中で突っ込みを入れる。

横では、桐誤くんがひたすらおかずを腹につめていたのだが、葉菊さんは気にする様子もない。

「トイレの花子さんなんかは、有名だよな。後は、夜に動き出す人体模型。誰もいない音楽室から聞こえるピアノの音。そうだねー、階段の段数が増減するっていうのも、よく聞くよね。屋上から聞こえるすすり泣く声、とかも。この学校でなら、呪い屋の話になるんだけど」

僕は首を傾げる。

葉菊さんは、満足したように、頷いてから続けた。

「呪い屋にね、友達を呪って下さいって頼んだ人がいたんだって。で、そのおかげかどうか、その友達は不幸に襲われることになってね。って言っても、石に躓くとか、鳥のふんが落ちてくるとかだったらしいんだけど。でも次第に、それがエスカレートしていったね。友達は、屋上の手すりが壊れてるのを知らずにもたれかかちゃって、そこから転落して死亡。不運な事故だよな。でも」

葉菊さんは人差し指を立てる。

「自分のせいだって、自分が呪いをかけるように頼んだせいだって、その人は思ったのね。悔いて悩んで後悔して悩んで、で、結局、自殺したのよ。友達が落ちた場所と同じところから、転落死」

「悩むなら呪うなよ。バカかそいつ」

「まあそう言わずに。でも、きつと、今もその人は悩み続けてるんだろっね。毎晩毎晩、後悔してこの屋上で泣いてるんだよ」

葉菊さんは天井を指差す。

つまり、そのさらに上の屋上を指し示しているのだからっけど。

「アホらし」

桐誤くんは一掃する。

「アホらしくなんてないよ。呪い屋っていうのは、本当に存在しているし」

「そうなの？」

食いついてきた僕に、葉菊さんは嬉しそうに話を続ける。

「友達が言ってたの。この学校から二駅ぐらい乗ったところに、呪い屋って看板がかかっている店があったんだって。今度連れて行ってもらうつもり」

「ほんとに？」

「それだけかよ。もういいからさっさと帰れ」

「それだけって、ひどいなー。本当の話なのに。ねえ、何で桐誤は私のこと嫌いななのよ。某川くん、知らない？」

僕は首を傾げる。

「だよ。まあいいや」

葉菊さんは椅子を元の位置に戻すと、ひらりと身を翻し、教卓まで移動した。

「じゃあね。また今度、面白い話持ってくるね。呪い屋行った感想とか、また聞かせてあげるから。それとも、一緒に来る？」

条件反射的に首を振ると、だよ、と笑われ、バイバイと手を振られた。

何となく視線で追いかけて、廊下まで追いかけたところで止めた。

即効で断ってしまったけど、良かったのだろうか。

そんな風に、少し後悔してみる。

あんな、友達も多くて頼りになる人なんて、僕にはなれそうもない。

「……だつてさ」

「もう、たくさんだよな」

桐誤くんは、言ってペットボトルのお茶を一気飲みする。

「呪いとか不老不死とか、何なんだよ。俺、何か憑いてるんじゃないか？」

「それなら、むしろ僕に憑いてるんだと思うな。それが移ったのかも」

「似たようなもんじゃねーか」

「御被いでも行く？」

「行つてなくなるなら、良いかもな」

生産性の無い話を繰り広げてみた。

「……今度、呪い屋行ってみるか？」

ペットボトルに顎を寄せ、窓を見つめる桐誤くん。

「ツンデレって言うんだっけ、これ」

「絶対違う」

真剣な顔で否定された。

四話

勉強するのかなんて分からないのに、僕はなぜか教科書を鞆にこれでもかというほど詰め込んできてしまった。何やってんだ。

重い重いと、思いながら歩く。

「よ、某川くん。どうだった？あの人と会った感想は」
「……」

僕は全く気づかなかつただけけれど、丁度今、僕の横に位置しているベンチに、青年が座っていた。爽やかな笑顔を貼り付けたまま、だ。

多分、二十歳前後だと思っっているのだが、その雰囲気からすると、未成年ではないように思える。

しかし、本人に直接たずねたことは無いので、それを完全に否定する事はできない。

僕の兄ちゃんが只今絶賛二十歳中で、ちなみにこれは暁のお姉さんと同じなのだけれど、それを思うとどうしたってそれを否定せずにはいられなくなるのが本当ではある。

とりあえず、二十代前半ということにしておこう。

「化沼さん」

僕は、今回の出来事の仕掛け人の名を呼んだ。

「んー、俺の名前はいかにも化沼だけど、質問に答えて欲しいな」

「明羅さんのことですか」

「それ以外に何がある？」

「でも、感想と言われても」

僕は口を噤む。

化沼さんは、何も答える気はないようで、そのまま僕の返答を待つ。

「驚きました」

「だろうね」

ニツコリと。

暁とは全く種類が違う笑顔を浮かべる。

「えっと、怪我がすぐ治るっていうのは、実際見せてもらったんだっけ？すぐって言っても、一分ぐらいだけど」

「そうですけど」

僕は少し考えてから、言う。

「明羅さんとは、どういう知り合いなんですか。えっと、あの……と、いうか」

僕は言うべき言葉を見つけれずに、数秒沈黙した。

「明羅さんが言ったことは、本当なんですか」

「あの人が某川に言ったこと全てを把握しているわけじゃないけれど、本当だよ、と言っておこうかな。そうそう、どういう知り合いかっていう質問に答えるなら、十年以上前からの知り合いって言うだけでいいかな。だからこそ、俺はあの人が年を取りにくいことを知っている。それが当たり前前の現実で、あるがままに受け止めていだけなんだよ。疑いようも無い、真実なんだから。これが全て夢の中の出来事で、起きたらまた別の世界ということも、ないとは否定しきれないけど……。そんなの、考えたって何にもならないからね」

大げさな身振りで話し終わると、僕に向き直る。

「そう、ですか」

僕は圧倒されて、それだけしか言えなかった。

「質問はそれだけ？」

「多分」

「そ」

もう少し聞きたいことはあったのに、その場の空気に流されて言うことが出来なかった。

十年以上前からの知り合い、か。

とすると、化沼さんが小学生くらいの頃からの知り合いということになる。

じゃあ、その時から明羅さんはほとんど今と同じ外見、ということになるのだろうか。

化沼さんに年齢も身長も追い越された、のだろうか。

周りはどうどん変化していくのに、自分は全然変われない。

それは、どんな気持ちなのだろう。

僕は明羅さんの言葉を思い出す。

明羅さんの表情を思い出す。

どっちにしろ、時間の流れは、残酷だ。

基本的に、化沼さんは嘘つき村の住人だと思っているのだが、この話に限っては信じてもいいように思った。信じようと、思った。

「あ、あと」

「何？」

「これとは関係ない話になるんですけど、暁の、お姉さんの」

「ああ、夜空ちゃん？」

化沼さんは何でもないように言う。

「それが、何？」

「いや、どうなのかなーと、思って……」

僕は視線をずらす。

化沼さんと夜空さんを引き合わせたのは、僕と暁なのだから、気にならないわけがないじゃないか。

「へえ、気になる？もしかして某川って、暁ちゃんみたいな可愛い子がいるにも関わらず、夜空ちゃんにお熱だったりして」

「……」

「冗談だって」

「あ、はい」

化沼さんはクスクスと小さく笑った。

「別に、何も無いよ。毎日のようにメールは来るけど、あんまり返信はしてない。とりあえず、友達になれたらいいかな。付きすぎず離れ過ぎず、が一番良いと思うよ。人間って」

「やっぱり」

夜空さんは、決してそんな関係を望んではいないけれど、これは仕方が無い。

そうだとしても、どうしてもというのが夜空さんの願望だったのだから。

「夜空ちゃんって、大人しそうに見えて、結構ガンガン来るよねえ。そういえば言ってたっけ。あの子、今までに彼氏が何十人もいたらしいって」

「そう、らしいですね。本当に、二桁いつてるのか知らないですけど」

「そ。まあ、何でもいいけど」

「あの、化沼さん」

僕は問う。

「夜空さんのこと、面白い子だって……」

「そうだよ」

化沼さんは、胡散臭い笑みを湛えながら、はっきりと肯定した。

「面白い子だと思うし、好きか嫌いかと問われたなら、好きだと答える自信はある。でも、そんな事を言ったら、俺は某川のことも、暁ちゃんのことだって好きだよ。基本的に、嫌いな人間なんていないんだ」

ちよいと首を傾げて、理解出来た？と笑みを浮かべている。

僕は頷いて、内心溜息をついた。

伍話

不老不死の噂は、聞いていた。

聞いていたけれど、今の自分には関係はないはずだ。

ならば、過去の自分と関係が無いとは、言えないのか。

私はそこで少し考えてみた。

「……」

過去と現在はどうしようもなく繋がっているのだ。

そう考えると、私にもこの噂の一端を背負うべきなのかもしれない。

「この噂を流したのって、霰くん？」

「まさか。俺がそんなことするわけないじゃない」

あっさりと否定される。

「私はどつちでもいいけど。ただ、こんな噂が流れてるっていうのは、あんまり良い気はしないのよね」

私は霰くんと対面するように腰掛けた。

「この話は、本当なの？」

「本当なわけないでしょ？不老不死の人間がまだいないのは、望月さんがよくよく知ってるんじゃないの？」

私はかすかに笑みを浮かべる。

「そうね。確かに、そうかもしれないけど……と」

そこで、私は茶化してみることにした。

「あなたは、私のことをいつまで望月と呼ぶの？昔みたいには呼んでくれないんだ」

「だって、それはあの人がくれた大切な大切なお名前じゃないですか」

「完璧な答えね、それ。もしかして事前に勉強してたりするのかしら」

立ち上がって、私はキッチンへ向かう。

「何が飲みたい？」

「何でも」
「でしょうね。」

私は適当に紅茶を二つ入れ、霰くんの元へ戻った。

「それにしてもあの人も……。いつまであんな事やり続けると思う？」

「死ぬまで、だろうね。いや、死んだってやり続けるのかもしれない。そのくらいの情熱はあるよ。それにしても」

霰くんは、紅茶を口元へ運ぶ。

「それに参加してた望月さんが、そんな事言ったらお終いでしよう」

「じゃあ、どう言えば良いのよ。あなたが助けたんじゃない、私を」

「そうか。そうだった。あの時逃げずに、大人しく実験台になっていたら、まず死んでたよね。100%とは言わないけど、99.99%ぐらいは。つまり、望月さんにとって、俺は命の恩人なわけだ」

「そうそう。だから私は霰くんに逆らえないのよ。あなたが私を欲しいと言うなら、喜んで差し上げましょう」

霰くんは、紅茶を口に運んだまま、目だけで私を見た。

「そこまで恩を感じる必要は無いよ。俺だって、無闇に人が死んでいくのを見るのは、嫌いだからね。人間だし」

私はそんな霰くんを見つめる。

いつもの如く、彼はこういう話には乗ってこない。

私だって、霰くんより四歳ほど年上だけど、外見はそれなりだと思っっている。

彼が全く私に興味が無いようなのは、きっと女に不自由しないからだ、勝手に思っただけのだけれど。

「霰くんって、私のこと苦手でしょう？」

「どうして？」

きょとんと、初めて見るようなレアな表情だった。

こういうのを見ると、彼も二十歳そこそこの青年なんだと思わされる。

「どうして分かった？隠しているつもりも無かったけど」

「無かったの!？」

なら、彼からするといつも私と接する時は、苦手ですよオーラをむんむん出していたということになる。

「分かった。分かりました。本当はこの後、呼び出されたからって、一人暮らしの女の部屋にのこのこやって来るなんて、無防備なことね、なんて言っつて襲っちゃおうというのを考えてただけど、分かりました。今日はもう帰っていいわ」

「そんなこと考えてたのかよ……」

聞こえるか聞こえないかというぐらいの、小さな声で吐き捨てるように言った。

私の視線に気づくと、

「それなら」

と立ち上がった。

「さっさと退散させてもらっつよ。お邪魔しました」

「あ、霰くん」

私は最後に呼びかける。

「私のことも、もっと信用してくれていいのよ」

「信用してますよ。これ以上ないっつてぐらいに」

いつもの爽やかな笑みとともに、彼は答えた。

六話

葉菊さんは教室でいつものように弁当を食べている僕たちに向き合
うと、こう話を切り出した。

「不老不死の人に、会ったんだって」

「……はあ？」

桐誤くんは隠そうともせず眉をよせた。

僕は、心臓が急に拍数を増やした。しかし、表情には出ていないは
ずだ。

「いやさ、呪い屋に行ったんだけど、そこにいた人がそんな事言っ
てて。変わった人だったよ。見た目茶髪で、今時のチャライ人って
言えばそうなんだけど、何て言うのかな。変な人だった」

話についていけずに、「どういうこと？」と聞き返す。

「呪い屋に行ったら、自称二十歳の黒田さんっていう人と、私たち
とそんなに年が変わらなさそうな女の子がいたんだけど、その黒田
さんがぺらぺらと変なことを話してて。私、何も聞いてないのにな
よ？神隠しがどうだとか、不老不死がどうだとか」

不老不死。

本当に、その黒田さんが会ったというのなら、明羅さんが言ってい
た一番目の人というのは、その人か？

けれど、そんな風にお気軽に吹聴できるようなことだろうか。

実際に見たのなら、そんなことできるわけない。少なくとも、僕だ
ったら。

でたらめという可能性も高い、と僕は思う。

でも、確かめておくことに越したことはない。

一度は、行くべきだろう。行ったところで、何も出来なくても。

「どうかした？」

「……え、いや、何でもない」

一瞬遅れて僕は答えた。

葉菊さんは不思議そうな顔をしたが、大して気に留めていないようだ。

「でも、そんなことあるわけないよね。どちらかといえば、神隠しのほうが現実的だし、実際人が消えるって、聞いたような話だもんね」

「神隠し……」

桐誤くんは、何かを思い出したかのように呟いた。

どうしたのかと問うと、あのさー、とぼんやりした様子で言葉を続けた。

「俺の一番下の妹と、同じクラスの女の子が行方不明なんだってよ」
桐誤くんには、姉が一人と妹が二人いる。今時珍しい四人兄弟だ。
一番下というと、玲ちゃん、だろう。

確か、今小学三年生のはずだ。

桐誤くんの身内話の中で、最も頻繁に出てくるから、僕も覚えている。一番下というと、やはり可愛いものなのだろう。

逆に言えば、姉という人物像は、僕はほとんど持っていない。そういうものなのかもしれない。

何でもなさそうに言葉を紡いでいるが、これはかなり大変な事件では、と僕が言いかけると、葉菊さんが即座に反応した。

「大変じゃないの、それって……」

「何ヶ月か前に聞いたんだけど、未だに見つからないらしい」

葉菊さんは完全に眼中に入らず、僕に向かってそう言った。

「早く見つかったらいいのにね」

「案外もう死んでたりして、だとか。玲なんかは最近そんな事ばかり入ってやがる。ひでー奴だよな、曲がりなりにも同じクラスの生徒だってのに」

「それは、何と云うか、ねえ」

葉菊さんは言葉を濁すようにもごもごと口を動かしていた。

「早く見つかってほしいねよね」

結論は、要するにそういうことだったらしい。

やはり、良い子だ。

「本当に心の底からそんな風に思ってるわけもねーだろうけどな」
「イラついたような桐誤くん。」

「そんなこと……」

口を閉ざしてしまった葉菊さん。

「その子の名前、何ていうの？」

僕が話を変えようと尋ねると、桐誤くんは淡々と答えた。

「空井羽子（なかいり）」

「うっご？」

「そう。一時よく聞いた名前だからな。覚えてる」

「空井、羽子……」

ぶっちゃけた話をすれば、僕とその子の間にはほとんど言っていないほど関係がないわけだから、その子がどうなっても僕には何も影響はない。

今考えるべきことは黒田さんという人のことだ。

その話はひとまず横に置いて、そっちを優先に考えよう。

考えたところで何も得るものはなくとも。

これは、警察の領分なのだから。

本当に、物騒な世の中だとそんな風に、僕はただ考えていた。

七話

それから数日後。

僕達は、葉菊さんの案内で呪い屋に行くことになった。

僕と葉菊さんと桐誤くんの、三人で、だ。

桐誤くんはと言うと、最後まで行くかどうか悩みに悩んでいたらしいが、結局はいい人で、一緒に来てくれることになった。

僕としても葉菊さんと二人きりというのは少しの抵抗が無い訳ではなかったのだ、有難いことだ。

途中の道々、かなり桐誤くんは不機嫌そうだったが、それはそれで分かっていただけでもあった。

「いらつしゃい」

呪い屋に入った瞬間、女の子に声をかけられる。

制服を来た、僕たちとあまり年が変わらなさそうな子だった。

真っ黒な、日本人形のような髪が印象的だ。

「あ、真理子ちゃん、だよね」

葉菊さんの言葉に、真理子ちゃん、と呼ばれたその子は一瞬何かという表情をしてから、思い出したように手を叩いた。

「この前の人、ですか。また来てくれたんですね。黒田さんが訳の分からない話をして大分引かれてたと思っていたんですが」

「そんなことないよ。その話をしたら興味を持った人がいたから、連れてきちゃった」

真理子ちゃんの視線が僕たち二人に向いた。

「そうですね……。なかなか変わった人たちですね」

ズバリと臆する事もなく無表情で言っただけのけると、それに付け加えてまた口を開いた。

「黒田さんは今コンビニかどこかに行ってますから、もう少しで帰ってくると思いますけど」

真理子ちゃんは適当に掛けて下さい、とソファを指差すが、本やプリントが山のように置かれている事に気がつき、片付け始めた。

「本当、黒田さんって散らかすのが得意だから困ります。こっちの身になってほしいですよ」

「真理子、さん？つて、ここでバイトでもしてんのか？」

桐誤くんが呼びなれない呼び名で真理子ちゃんを呼ぶと、はい、と当たり前のような返事が返ってきた。

「私はまだ中三なんですけど、黒田さんにはちょっとした恩があるのでこういう事をやってるんです。本当のところはバイトじゃなくて、ボランティアというか、まあ私が勝手にやってるだけなんですよ。もちろんお金も貰ってませんし」

「恩？」

「そうです。恩です」

それ以上説明する気はないらしい。真理子ちゃんは口を閉ざして掃除に熱中し始めた。

確かに、周りを見渡してみるとそこらに物が散らかっている。

それは主に本などが、表紙がなくなっていたりページがバラバラになって本の形を成していないものなどさまざまだ。

本は大事に扱いましょう。

そして、部屋の中央には、おそらく黒田さんの定位置であろう椅子と机が置かれている。

そこはさらに汚く、ここからでも見て分かるほど埃にまみれている部分が多い。

他のところは、真理子ちゃんの掃除のおかげか少なくとも埃はないので、あそこだけは手をつけさせてもらえないのかもしれない。

そんな考えを巡らせていると、「あ」と真理子ちゃんは短く声を上げた。

「あら。お客さん？珍しいね」

そこにいたのは、金髪の見るとチャラチャラした感じの青年だった。

いつの間に。

音もなく、まるで瞬間移動でもしたのでは、と疑いたくなるその人は、ピアスこそは開けていないものの、アクセサリーやら指輪やらをジャラジャラとつけている。

オシャレか何かのつもりであろう破れたジーパンに、サンダル。

僕が一番苦手とするタイプだ。

年が近そうな、僕の兄ちゃんだったり化沼さんだったり夜空さんなどなどを思い浮かべてみるけれど、そういう人たちとは真逆の存在。見た目で人を判断するなと言っても、これでは判断せざるを得ない。そんな人だった。

足を引きずるようにして、彼は部屋の中央まで歩く。

そして椅子に座ってから、一言。

「俺は、黒田です。よろしく」

につこりと人懐っこそうな笑みを浮かべる。

僕はそのギャップに驚きつつも頭を下げた。

「真理子ちゃん、で、この人たちは何なの？」

「そういえば、何も聞いてないですね」

真理子ちゃんはしらっとそれだけ答えると、また作業に戻る。

「そっか、聞いてないのか。まあ、ここが呪い屋だっていうのは当然の如く知っているんだろうけど、誰か呪ってほしいとか、そゆこと？」

僕たちを真正面に迎えると、黒田さんは主に僕の方を見てそう問いかけた。

「いえ、その、私はこの前にも来たことがあるんですけど、そのことを話したら友達が興味があるって言って……」

ね？と問いかけるように首を傾げられて、僕は頷く。

息を吸って、僕は話し出した。

「黒田さんが、不老不死の人に会ったと聞いたんですけど」

「へえ？そういうの興味あるのかな、君は？おっと、ちなみにまだ名前を聞いてなかったね」

急かされて、僕は軽く自己紹介をし、そこでまた本筋に戻る。

「そうそう、ちょっと知り合いからそういう話を聞いて、そしたら会わせてくれるというもんだからね。可愛いというか、綺麗な女の子だったよ。某川くんたちにも合わせてあげたいくらいに」

「それってもしかして、明羅さんのことですか？」

桐誤くんが跳ねを返したようにそう言うと、黒田さんは心底面白いという表情をした。

葉菊さんは、まるで蚊帳の外と言った感じだ。

もしかなくとも、そうなのだろう。

「会ったことがあるってことかな？それならそれはどういった時にどういう状況で？もしかして僕と同じで、誰から紹介されたとか？」

「……化沼さん、なんですけど」

その瞬間、黒田さんは僕を見て、「いやはや」と現実では聞くことがあまりなさそうな言葉で驚きを示す。

黒田さんは、化沼さんと知り合いだったのか、と半ば納得しかけていると、「いやね」と彼は言葉を紡ぎ出した。

「化沼さんは、僕の高校時代の先輩なんだよ。二つ上の、ね」

「え」

実際のところ、これはそれほど驚くことでもないのに、僕は化沼さんに高校時代なんてあったんだ、という部分で驚いていた。あの人は本当にそんな人なのだ。

「本当に面白い人だろう、化沼さんは。どうやったら不老不死の間と知り合いになれるんだろうね。それはそうと、高校時代で一つ思い出したことがあるから少し話してもいいかな、話すけど」

「僕が高一の時あの人は高三だったんだけどね？化沼さんってあの容姿のせいでかなり人気があったもんだから、僕もよく知っていたんだよ。確かに始めて彼を見た時、男の僕でもほればれたね。別世界の住人じゃないかって。制服が似合う人ランキングっていう、要するにイケメンランキングっていうのを新聞部が年に一回作っていたんだけど、それは三年連続一位だったみたいだしね。それに、

二位は奥瀬成介だよ。知ってる？今テレビにも出てるんだけど」

「奥瀬成介って、今ドラマとかCMとか良く出てる人じゃないですか！」

葉菊さんは一番に反応した。

桐誤くんはあんぐりと口を開けている。マジで？という感じだ。

僕も知っているのだから、結構な知名度の人のはずだ。前にテレビで見た時、普通に格好良さげな人だと思ったことを覚えている。

「じゃあ、つまり奥瀬成介と同じ学校だったってことですか……っ！」

身を乗り出すように、桐誤くんは言ってから我に返ったように大人しくなる。

もしかしなくても、ファンなのだろうか。

「私けっこう好きなんですけど。本当、それより格好良いって、化沼さんって何者……！」

「化沼さんは、私も好きですよ。目の保養になりますし、いつもお菓子をくれますから」

「真理子ちゃんの場合は主にお菓子だろうか？」

クツクツとからかうように笑うと、黒田さんは僕に向いた。

「いやあ、世界っていうものは狭いものだね。君たちとは何だか仲良くなれる気がするよ。仲間も増えた事だし、化沼さんファンクラブでも作ってみるかい？」

「本人は絶対嫌がりますよ」

「仲間って、そういう仲間じゃないじゃないですか！不老不死がどうのとか、そういうことで……」

何か桐誤くんの怒りメーターに触れてしまったようだ。何か、なんて曖昧な言い方をしなくても、それは分かりきっているけれど。

「それに、もしかしてアンタがああ噂を流したんですか？」

「それは違う。その噂を聞いたから興味が出たんだよ」

「そうだとっても、そんなのに乗っかるようなことをベラベラ話するのはどうだかって話ですよ！いくら本当だとしても」

桐誤くんはちらりと僕を見る。僕の気持ちを代弁してくれた、というところだろう。

どうせ、僕にはこんなこと言えっこない。

「きつと、誰も信じないだろうからね」

黒田さんは机の上の散らかった本を見つめる。

「本人を見てない人は、信じるわけがないんだよ。そうは思わないかい？それに、俺は生憎おしゃべりだからね。こんなこと、誰かに話さずにはいられない」

桐誤くんは口をへの字にさせ、「そうですね」とそれだけ言って、歩き出す。

「帰ろうぜ」

そんな言葉のままに僕が歩き出すと、葉菊さんもいそいそと付いてくる。

「また、いつでも来てね」

背中から声が聞こえてきて、来ないわけがない、と確信もないままにそう思った。

七の二話

「どういうこと？」

「そうだ。この言葉が来ないわけがない。」

葉菊さんは、疑いの眼差しで僕たちを見る。

呪い屋を出てからの帰り道は、どうやら複雑なことになりそうだ。

「どうも何もねーよ。てめーには関係ない」

「関係ないって、あんな話聞いちゃったのに関係ないって、そんなのないでしょ」

いつもより怒り三割増しの桐誤くんにも臆することなく尋ねる。

「お前が勝手に聞いたただけだろーが」

「聞く以外にどうしろって言うの、ねえ某川くん？」

「……あー、うん」

桐誤くんでは拉致があかないと知ったのが、僕に向かう葉菊さん。困る。

これを承知で連れてきたというのも、あるのだけど実際なってしまうとどうしていいか分からない。

「明羅さんって人、死なないの？」

「いや、不老不死もどき、らしい」

「もどき？」

「年を取るのが遅い、とか」

「そうなの？」

「んな事言ったって信じるわけねーだろこいつが」

「ん……っと、じゃあ、会わせてよ。その人に」

それは否定せず、一番僕たちにとって難しいことを淡々と言う。

「会ったら信じられる気がするし」

「めんどくせ」

「んー」

僕ら二人の反応を見るに、どうやら無理そうだと感じ取ったらしい

葉菊さんは、

「じゃあこの気持ちはどうしたらいいのよ」
とぶーたれている。

「その内、機会があつたら」

とフォローにも何もなつてない言葉をかけると、葉菊さんは不承不承という感じで頷いた。

「その内、ね」

曖昧な言葉だ。何の当てにもならないけれど、葉菊さんは納得してくれた。

「じゃあ、もう一つ聞きたいんだけど」

そしてパッと顔を明るくして、場を明るくしようとするように明るい声で人差し指を立てた。

「化沼さんって人に会つてみたいな」

「やめとけよ、ミーハーが」

「……あの人、ぶらついてたらひよっこり出てくる人だから」

そういえば、いつも向こうから声をかけられるばかりで、こっちが化沼さんの姿を見て、という事は一度もない。忍者か。

「へえー、そうなんだ。じゃあその内会えるのかな」

桐誤くんの言葉は完全にシャットアウトしている。

「運が良ければ」

桐誤くんはあからさまな溜息をついた。

「人は見た目じゃねーんだよ、中身なんだよ」

「でも、一回くらい会いたいよ。そんなに格好良い人なら。あの奥

瀬成介より、って話らしいし」

「あんな奴が奥瀬成介より格好いいわけあるかっ!」

「あはは、桐誤って奥瀬成介のファンなんだ。私と一緒に」

「一緒にするな」

ジトリと睨みつけた後、早足で歩いていってしまう桐誤くん。

残った二人は何となくお互い見詰め合つて、あーあと肩を竦めた。

八話

学校終わり。

最寄駅に着き、いつものように定期券を通していつものように家へ向かう……というなんら変わりないことを行動に移そうとしていたのだが、その時ふと目に止まった。

頭のとっぺんでお団子にし、その真ん中から髪が一房出ていて、ともすれば触覚のような、一風変わった髪形。前髪はいつもの如くきつちりと真つ直ぐ下ろされていて、僕は声をかけた。

「そんなとこ座って、汚くないか」

その真つ赤なワンピースが黒くなるよ、と僕が指摘すると、暁は笑った。

「大丈夫だよ。あのねあのね、きみが家に帰ってくるのが待てなかつたんだよ」

暁が動きたびにみょんみょんと、触覚は生き物のように動く。

「んふふ」

暁が嬉しそうに笑うので、僕が意味もなくそれを掴むと、どうしてかさらに無邪気に笑った。

「きみならそうすると思ったよ。あーちゃんの思った通りだね」

見抜かれていたのか。うむ。

暁はパンパンとお尻の埃を払うようにして立ち上がって、僕を手招いた。

「歩きながら話そうよ。ちょっと大事な話なんだよね」

「大事な話って」

僕は暁の横に並んで歩き出した。

「大事な話っていうか、大事なお話かな。えっとねえっとね、大事な頼み事なのかもしれないけどね」

暁は手をもじもじと、らしくなくほそぼそと言う。

「きみは、明日は暇かな？」

僕はスケジュールを思い浮かべてみる。明日は土曜だ。そんな事を考えてみて、僕はそもそも考える必要がないことに気づいた。

「暇」

「だよ。うんとね、あーちゃんと一緒に来て欲しい所があるんだよ」

「暁となら別にどこへでも行くけど、ちなみにどこに行くんだ？」

「お楽しみだよそれは。当日まで、楽しみにしててよ」

「そっか」

暁はそこで少し笑顔の度合いを減らした。さっきまでがニコニコニコニコだったとすると、今はニコリ、ぐらい。

「きみはさ、あーちゃんが地獄に一緒に行こうって言っても、そうやって二つ返事でおっけーしてくれるのかな？」

「どういうこと、それ」

「あんまり意味は無いかな。んつとね、あーちゃんのことを、きみがどれくらい好きなのかが分かるよ」

「……地獄でもどこでも行くよ。一緒に」

「うわー、やったね初告白だね。あーちゃんもきみの好きだよ」

「どうも」

いつものような小洒落た会話を追え、僕は横目で暁を見た。

「何かな？」

「いや、うん。暁は暁だ」

「あーちゃんはあーちゃんだよ。うん」

それから一定の距離を保ちつつ、手をつなぐことなんて微塵も考えずに家まで歩いた。

九話

そして、昨日にとつての明日がやって来た。
天候は、雨も降っていないければ晴れてもいない。まずまずの天気だった。

暁が僕の家まで来て、それから向かう。

電車に乗り、バスに乗り、数分歩いて目的地にたどり着いた。遠くはないが、近くもない。

「ここだよ」

と、暁が指すのは、草の中。

「……」

さすがに言葉が出なかった。しかし、かき分けてみると少なからず道があるようで、少し安心する。

森というわけではないが、とりあえず人が普通に入りそうもない草が生い茂っている場所を行こうというのだ。

この先に一体何があるというのか。

僕は頷いて歩き出した。

暫く草を掻き分けていくと、意外とすぐにほとんど邪魔にならない程度に整理されていた。これは、誰かが故意にやっていると考えるのが適当だろう。

十分ほどで、やっと広場のような場所に出た。

この先には、元は真っ白だっただろうに、今は黒ずんでいる古ぼけた建物を見つけた。

「これだよ」

暁は笑う。

近づいてその建物を見ると、あまり人が住んでいる気配は無かった。ぼろぼろだし。

暁は躊躇いもなく玄関らしい扉を開けようとするが、鍵がかかっている。

ガチャガチャと数回ノブを回しても、押す事も引く事も出来なかった。

そして暁に誘われ裏側に回ってみるが、それも無駄足だった。建物の後ろ半分は草や何やらで覆われていて、どうする事もできない。

どうするんだと暁を横目で見ると。

「ちよつと待つてて」

暁はがさらと無理やりその中へ突っ込んでいき、木や葉っぱを掻き分けて進んでいく。

「怪我するなよー」と止めることもなくただ小さく声をかけた僕は、その後の出来事を突っ立ったままで待った。

音が少し遠くなったところで、ギャー！と大層な女性の叫び声が聞こえてきた。

お化け屋敷、あるいはジェットコースターでしか聞けないような超ド級のものだ。

けれど、暁ではない。

多分、この建物の住人だろう。こんな所に人が住んでいたというのにも驚きだが。

窓から草を掻き分けて進む暁を見たのだとしたら、この叫び声にも納得がいく。

普通、こんな所に人がいるとは思わない。

暁はがさがさと音を立てて戻ってきて、一言。

「驚かしちゃったよ」

「すごい声聞こえたけど」

「うん、でもでも、事情を説明したら入り口開けてくれるって言うてくれたよ」

僕が暁の服やら髪やらについている葉っぱや得体の知れないものを指摘すると、暁は楽器でも演奏するようにポンポンと軽やかにそれらを払った。

入り口へ戻ると、そこは数センチだけ開いてそこから目が出ていた。

「ええと、どんなご用件で？」

完全に怪しまれている。その女性の声はしどろもどろだ。

「えっと、ご用件なんて大したものじゃないんだけどね。ちょっと聞きたいことが」

そこまで言ったところで急激に、扉が開く。

雷のような音がして扉は壁にぶつかつた。壊れるぞ。

「あんた達も、不老不死になりたいの？」

一目見て、可愛らしい女の子。

おかつぱ頭で、カッターシャツにプリーツスカート。

小学生高学年ほどにも見えるが、僕の見立てはあまり当てにしないほうがいい。

どうやら壁事件の犯人はこの子のようだ。

それと同時に、さっきまでの女性の姿も露になる。

おさげに眼鏡に、白衣。

二十代前半程度と思われる彼女は、驚きのあまり目を見開いたままだ。

「……も、もう。何変なこと言ってるんですかあ。ほら、二階戻つて。今お客さんいるんだから」

「だから、こんな所に来るなんて、そういうのがらみしかないでしょ、で、どうなの？」

睨みつけるように僕たちを見て、答えを聞かないまま少女は僕たちを引っ張った。もちろん、建物の中へ。

「あたし、丁度暇なの。どうせだから遊んでよ」

そうして、僕と暁の手首を掴んだまま、入ったすぐ右にある階段をなれた風に乗っていく。

「あ、ちよ、」

慌てたように白衣さんは後ろをついてくる。

僕はされるままに歩き、そこで一つの部屋に入った。

真正面の奥には窓が一つ、その下にはベッドが置かれていて、その周りにはゲーム機や、漫画がざっくばらんにちらかしてある。そし

て、僕たちのすぐ横には小さなテレビが置かれていた。昔のもの
ままだろうという感じがありありとする、分厚いテレビ。

部屋の中央には絨毯が敷かれていて、少女はそこまで僕たちを連れ、
丸い机を囲むように座った。

追いついた白衣さんは、はあと嘆息し、腰に手を当てた。

「何して遊ぶ？トランプ？人生ゲーム？テレビゲームもあるけど」

「ちよつとちよつと、ちよつとひとまず待って」

白衣さんは少女にそう制すと、えつと、と居住まいを正した。

少女はぶーと不満そうに頬を膨らます。

「えつと、すいません。それで、ご用件の方を窺いたいのですけど」
白衣さんはさつきより大分しつかりした口調で、はつきりと暁を見
る。

暁はゆっくり立ち上がって、一言で答えを済ました。

「宵つて人、知らないかな？」

誰だ、それ。

「宵？」

白衣さんも僕と同じ意見のようで、始めて聞いた言葉だと言つよう
に首を傾げた。

数秒頭を悩めていたが、

「ちよつと、多分私は知らない人だと思います」

「そつか。そかそか」

暁はゆっくりとその言葉を飲み込み、いつものように笑った。

一体、どういう事なのだろう。後で詳しく聞いてみるのにも、気が
引ける。

その事に安心を得たようで、白衣さんはもう一度口を開いた。

「その方とは、どういうお知り合いなんですか？」と。

「お姉ちゃん」

これもまた簡潔に暁は答えた。

お姉ちゃん。

夜空さん以外の、お姉ちゃん？それって、三姉妹だったということ

か。

「暁」

僕が呼ぶと、嬉しそうに笑って、「そういえば、君にも言ったこと無かったかな」とすっ呆けた。

「お姉さん、ですか。えっと、ちなみにおいくつぐらいの……？」

「二十六、かな。多分、今はそれくらい」

「そうですか……」

暁はもしかして、と思ったのだろう。暫く期待するように白衣さんを見つめ、その後何も言葉が続かないと目を瞑った。

結局、暁はこれが聞きたくてわざわざここまで来たという事になる。つまり、暁は宵さんと連絡を取れない状況にあり、探しているという事、か。

どうして今、ここにその宵さんがいると思ったのかは分からないが、理由は必ずあるはずだ。

僕が、協力しない理由はない。

暁が拒まなければ、の話だが。今まで一言も聞いたことが無かったのだから。

九の二話

暁が座つたのを合図のように、少女はトランプを取り出した。

「話は終わったみたいだから、トランプしよう」

白衣さんはそんな僕たちの微笑ましい？様子を見つめ、手持ち無沙汰のように髪を耳にかけると、

「お茶！お茶とお菓子持ってきます。だから変なことはいわないようにね」

手を打ちながら言つて、最後に忠告を加えて部屋を出て行った。

パタンと扉が閉まる音を聞き、その後無音でカードを配る少女。

「そういえば名前聞いてなかったね」

トランプに目を向けたまま、少女は自然に話し出した。

「この人は、暁でいいの？」

少女は暁本人に確認を取る。僕が先ほど言ったのをしっかりと覚えていたらしい。

「うん。そうだよ。で、あなたはなんて名前？」

「何でもいいでしょ。少女AでもBでも」

答える気はさらさら無いと、そう突っぱねた。

カードを全て配り終え、少女Aは僕に向いた。いくつかのカードを抜き取り、見せられる。どうやらババ抜きのようだ。

僕も同じようにして少女のカード選びに準じることにする。

「あなたは？」

「……某川」

「くれ、かわ？ふーん。某川か」

お、当たり前。僕は一緒だったカードを抜き取り、捨てた。

「二人は恋人？」

「違う気がする」

「違うの？」

少女Aは暁を振り返る。

「んー。恋人よりももっと深い関係かな。ね、そうだよね」
同意を求められても、反論も何も出来ない自分がいた。

少女Aは途端わくわくとした、年齢に似合う好奇心の強い顔になる。それを思うと、さっきまでの表情は大人びていたのだなと改めて実感する。

「えへへ。えーちゃんにはあげないよ」

少女AからAの部分だけを切り取った呼び名で、暁は少女のことを呼んだ。

それに不服を感じている様子もなく、当たり前のように少女は受け止めた。僕もそう呼ぶことにしようか。

「いけないよ」

「えへへ。なら良かった」

迷いなく拒否されたことに、少なからず心が傷つかないでもなかった。

するとコンコンとノックが鳴り、白衣さんが現れた。

お茶を五つ盆にのせ、煎餅を袋ごと手づかみで持っている。渋い。

嫌いじゃないけど。

「あなたの名前は？」

暁は帰ってくるなり、さっきの流れのままに質問する。

「え？ああ、私は瑠璃です」

何ともなしに答え、三つのお茶を丸い机に並べて後の二つは床に置く。

二つ。二つ？

僕は今の人数を数え、一つ多いことに気づいた。

聞きたい。が、何か今はそんな感じでもない気がする。

悶々と考え、心の中で溜息をつく。

僕は僕のこういうところが嫌いだ。そうでなくても僕は僕が嫌いだ。大嫌いではなく、嫌い。そこに大きな違いがある。

瑠璃さんは煎餅の袋をあけ、ごめんなさいお皿が無くて、と前置きした。

「けんの分なんていらぬのに」

「そんな事言わないの。折角買いに行ってくれてるんだから」
判明した。残りの一つはけんという人の分だ。

「買いに行ってる？」

暁は、即座に聞き覚えの無い人物の名を繰り返し、首をかしげた。

「そうなんです。けんくんっていうのは、その……まあ、ここで私を助けてくれてる中学生で」

「んー。良く分かんないけど、そうなんだね」

暁は適当に頷いた。

白衣さんの様子を見ると、それが一番の答えだったようだ。心なしか安堵している。

そしてまたゲームを再開するが、そこで無音が続いた。

「……某川って、全然喋らないのね」

と、静寂を打ち破ろうとしたわけではなさそうだが、えーちゃんがぽつりと呟いた。

「……まあ」

無口なので。とは言わない。

けれど、僕だけではなくここにいる部屋の住人たちもそれほど饒舌ではないと思う。とも言わない。

「人形みたい」

そう言われてもどうこうする僕ではない。そうかも、と肯定した。するとえーちゃんは動きを止めて、物珍しそうに僕を見つめた。

「否定しないの？っていうか、怒らないわけ？」

怒るわけない。確かにその通りなのかもしれないのだから。

「うん」

えーちゃんの周りにはキレやすい人が多いのだろうか、と思わせるような反応だった。

「ふーん。変わってる」

初対面の人に、挑発的な言葉をかけられる人のほうが変わっているだろうに。言わないけど。

すると暁に向き直り、「いらないけど、たまに貸してよ」「とそっきの言葉を前言撤回した。

「うん。いいよ」

勝手に僕が貸し出されている。いいのかこれだと思うずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9583/>

アナリシス

2011年10月7日02時52分発行